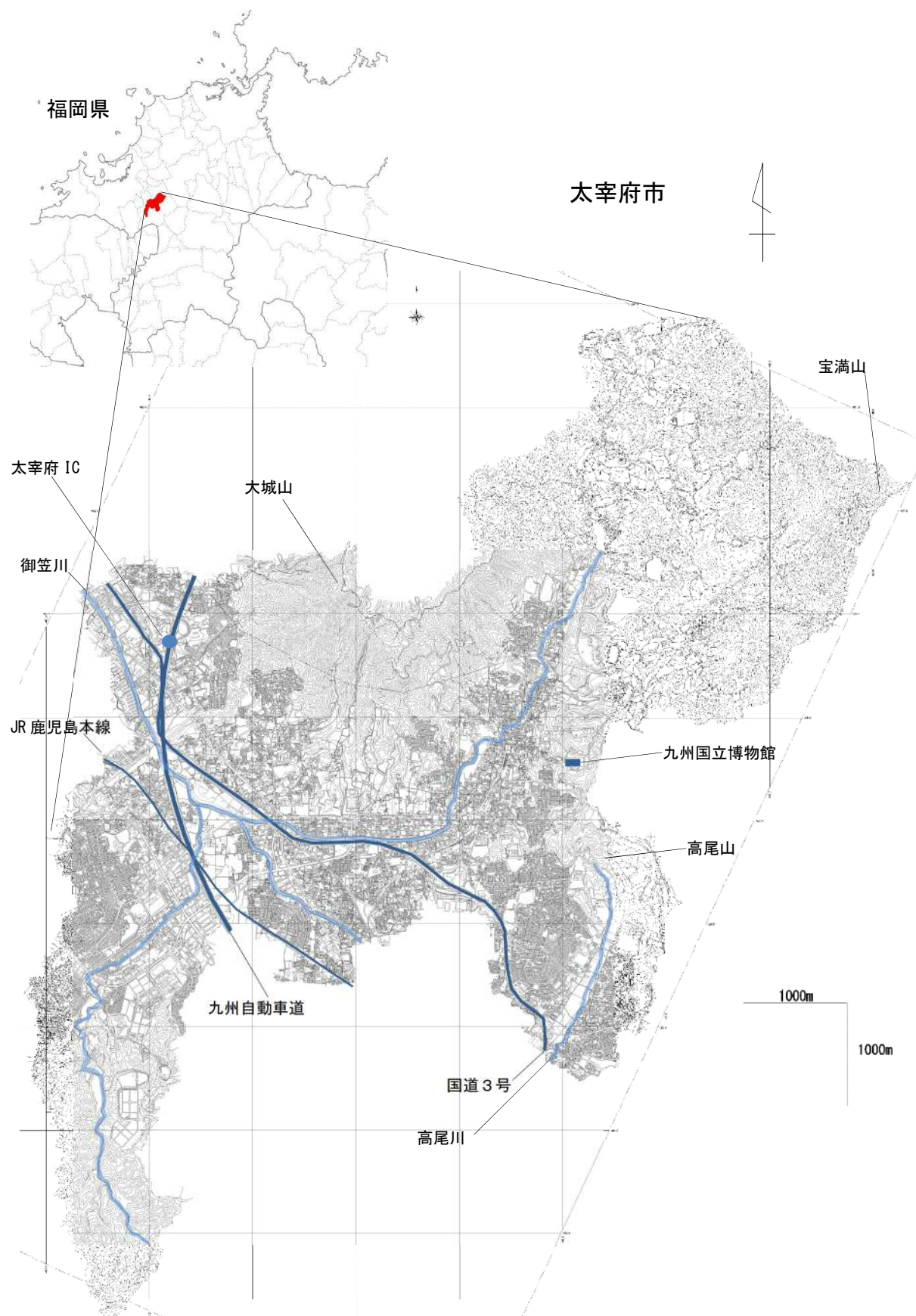
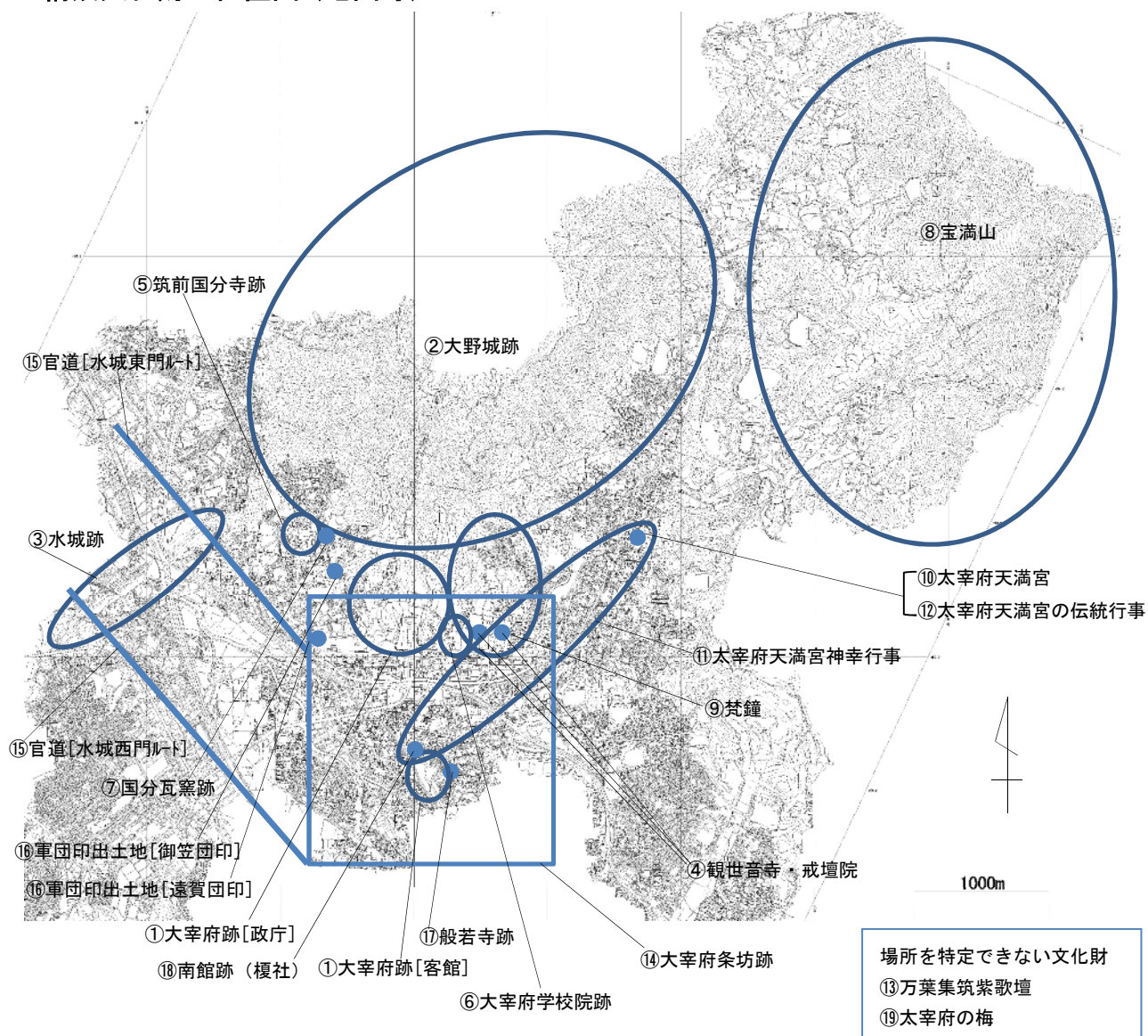


① 申請者	太宰府市	② タイプ	<div>地域型</div> / シリアル型 <div>A</div> <div>B</div> C D E	
③ タイトル				
古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<p>大宰府政庁を中心としたこの地域は、東アジアからの文化、宗教、政治、人などが流入・集積するのみならず、古代日本にとって東アジアとの外交、軍事の拠点でもあり、軍事施設や都市機能を建設するのに地の利を活かした理想の場所であった。現在においても大宰府跡とその周辺景観は当時の面影を残し、宗教施設、迎賓施設、直線的な道や碁盤目の地割跡は、1300年前の古代国際都市「西の都」を現代において体感できる場所である。</p>				
				
大宰府政庁跡（南から）		古代国際都市大宰府の現在（南西から）		
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名	有田ゆきな（ありた） 城戸康利（きどやすとし）			
電 話	092-921-2121（内 475）	FAX	092-921-3667	
E-mail	bunkazai@city.dazaifu.lg.jp			
住 所	〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1-1-1			

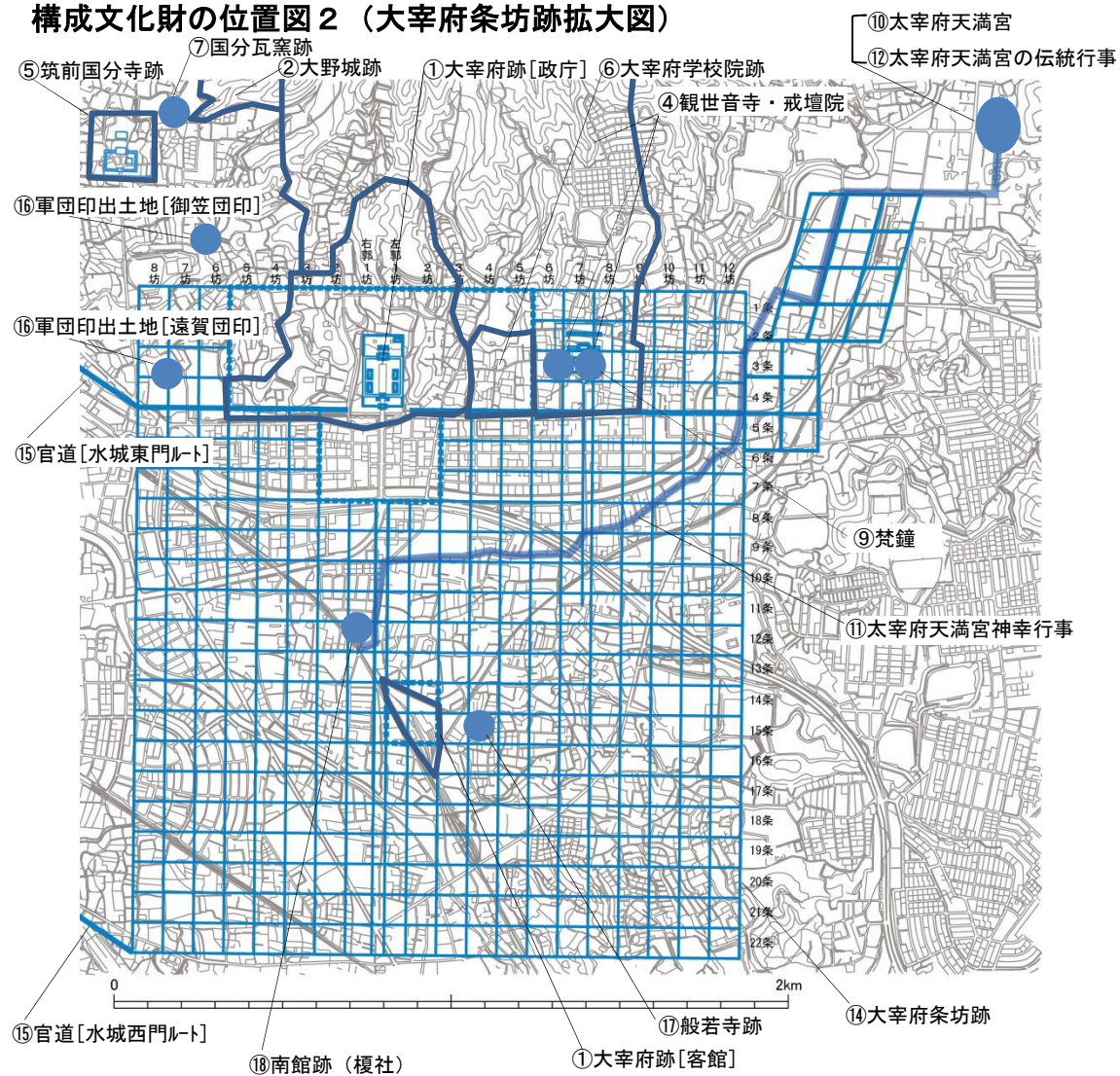
市町村の位置図（地図等）



構成文化財の位置図（地図等） 1



構成文化財の位置図 2 (大宰府条坊跡拡大図)



※構成文化財がある地域を拡大し、構成文化財の位置を示す

(様式 2-1 の番号に対応させること)

※複数ページにわたっても可

ストーリー

「西の都」太宰府

日本の西、九州の地にはかつて都があった。それが太宰府である。

1300年前、そこには「大君の遠の朝廷」である大宰府がおかれ（『万葉集』）、「天下之一都会」と呼ばれた（『続日本紀』）。古代・中世を通して、日本の宮都や海外からもたらされる先進文化で彩られていた。

世界とつながる「西の都」

1300年前、中国の唐王朝が世界帝国として繁栄していた。このため唐の文物・文化・政治システムを周辺諸国は進んで取り入れ、日本も、大宝の遣唐使・あわたのまひと粟田真人が唐から先進の情報を持ち帰り、改革を進めた。こうして日本は歴史上もっとも国際色豊かな時代といわれる奈良時代を迎えることとなる。

皇帝に厚遇された粟田真人が見た唐の都長安は、東アジアの先端となる都市であった。彼が収集した情報をもとに平城京と太宰府はつくられた。太宰府にはすでに百済の宮都を模した要塞が築かれていたが、唐の宮都を実際に見た粟田真人が赴任し直接造営に携わることで、「西の都」として新たに生まれ変わったのである。

それは水城や大野城など前代の要塞を利用し、その中に約 2km 四方にわたって基盤目の街区（大宰府条坊）を設けた本格的な都城であった。大宰府政庁や関連する役所を街区の北の中央に据え、その前面には朱雀大路を敷設した。その幅は長安城朱雀大街の 1/4、平城京朱雀大路の 1/2 という規格をもち、国内2位の広さを誇っていた。まちには人びとの住まいとともに、官人子弟の教育機関（学校院）、天皇にゆかりのある寺院（観世音寺・般若寺）、迎賓館（客館）など、宮都と同様の施設が備えられた。屋根には都と同じデザインの蓮華文の甍が軒を連ね、粟田真人が唐で見た獅子像と同じ顔の鬼瓦が行き交う人々を見下ろしていた。

このように太宰府は、東アジアの国際標準の都の仕様で築かれた都市であった。それは、この地を訪れた人々に日本の国際性を目に見える形で示すべく、古代国家が威信をかけて築いた「西の都」だったのである。こうして、外国使節や商人が往来し、舶来の品々が行き交う国際都市が誕生した。

外国使節を迎える都

「西の都」では、外国使節を迎え国家による外交・交易が行われた。使節（賓客）は最初に博多湾岸の筑紫館（鴻臚館）に入り、ここから大宰府に向かった。筑紫館を発った使節は、直線的に伸びる官道を進み、天智朝に築かれた水城の西門に至り、さらに進んで推定羅城門から太宰府の街並みを眺めつつ朱雀大路を北上し、客館に入り滞在した。そして外交儀礼に際しては、威儀をととのえ、客館から朱雀大路を北上し大宰府政庁へ向かった。政庁では楽が流れるなか、儀礼、そしてもてなしの饗宴が行われた。滞在する使節のために日本・唐・新羅の最高級の食器が備えられ、豪華な食が振舞われた。ときに中国将来の喫茶も行われてい

西の都 大宰府



た。

花開く文化

このような「西の都」太宰府では文化的素養を持った人物が外国の賓客をもてなすためにも求められ、また、人の交流拠点でもあったため鑑真、空海、最澄などの知識人も滞在し、新しい文化が流入、集積していった。例えば平安時代初期の書画詩文に秀でた小野篁^{おののたかむら}は、大宰鴻臚館で唐人と漢詩を唱和し交流を深めている。また、万葉集に収められる大宰府の長官であった大伴旅人^{おおともたびと}邸で行われた「梅花宴^{ばいかのえん}」では唐から持ち込まれたばかりの梅の花をめでつつ和歌を披露しあうという新しい文化が生まれた。

その後、梅は菅原道真の伝承とともに、時代を越えて太宰府と関連深い花として親しまれている。太宰府での道真は朱雀大路に面した南館で不自由な生活を送ったとされ、没後太宰府天満宮に祀られるようになると南館と天満宮の間で神幸行事が行われるようになった。現在も続く神幸行事は大宰府条坊など古代の地割を踏襲した道を使って平安絵巻が年に一回秋分の日に展開される。



先進文化の集積

観世音寺は「西の都」で繰り広げられた交流により多くの文化・文物が集まった姿を今に伝える。観世音寺は、天智天皇^{てんち}が発願し、唐で玄宗皇帝^{げんそう}から袈裟^{げんぼう}を直接賜った玄昉^{げんぼう}が落慶法要を営んだ官寺である。5mを超える観世音菩薩像を始め都や大陸文化の影響を受けた彫像が次々と造立されていった。舞楽もおかれ外国使節の饗宴では使者をもてなしていた。その面が伝わっている。また、鑑真は日本に漂着後、観世音寺に滞在し正式な僧になるための授戒を日本で初めて行った。



そのこともあってか、天下三戒壇のひとつとされ多くの僧を輩出した。授戒を行う戒壇そのものが現在に伝わっている。空海など入唐僧の長期滞在もあり唐から持帰った経論の書写などがなされていた。さらに、梵鐘は日本最古のものであり、菅原道真が漢詩「不出門」で「観（世）音寺は只 鐘聲を聴く」と詠んだ正にその鐘である。

このように、太宰府は朝廷が外交・交易を行うために設けた「西の都」であった。それは百済の宮都・唐の宮都にならって築かれ、東アジアの先進文化と日本の文化とが行き交う場所であった。その遺産は太宰府の随所にみられ、日本を代表する古都のひとつとして、人々を魅了している。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	大宰府跡	国特別史跡	九州の政治・文化の中心であり、日本の外交、対外防備の先端拠点であった大宰府の中核。1300 年前に設けられた。平城宮などと同じ朝堂院形式の政庁、周辺官衙、外国使節を迎えるため設けられた客館などで構成される。大宰府の赴任者には遣唐使経験者など国際的に活躍した人物も多い。政庁跡周辺からの景観は、古代を想像する上で絶好の場所である。	
2	大野城跡	国特別史跡	1350 年前、百済から亡命した貴族らとともに自然地形を生かし築造された古代山城。百済の都・扶余の扶蘇山城に擬えられ、水城等とともに百済系都城の姿を今に伝える。ここから大宰府全体を一望でき、遠く玄界灘も望むことができる。	
3	水城跡	国特別史跡	1350 年前の百済の役敗戦に際し、日本を守るため初めに築かれた城砦。水を貯えた濠と土塁とからなっており、今も長さ 1.2 km もの巨大な土塁を目にすることができる。百済の都・扶余の東羅城（城壁）と同じ築造技術が採用されている。のちに大宰府の出入口となり、外国使節や都からの官人らを迎え、数々の物語が残される。	
4	観世音寺・戒壇院	国史跡 (観世音寺境内及び子院跡 附老司瓦窯跡) 国重文 (彫刻) 県有形 (建造物・工芸)	母斉明天皇の追善のため天智天皇の発願で建立された寺院。周辺に 49 の子院があったとされ、伽藍を示す礎石等が残り古代の繁栄を示している。当寺には大陸由来の舞楽を行う楽団を備えており、陵王、納曽利の面（国重文）が現存する。落慶法要を行った玄昉の塚が残る。鑑真・空海も滞在し、授戒もこの寺で初めて行われたとされ、天下の三戒壇の一つとなった。戒壇院には戒壇が伝わる。安置される 16 軀の諸仏（国重文）は平安～鎌倉時代の洗練された造像で、仏教文化が継続して伝わっていたことを示している。現在も同地で観世音寺（金堂、講堂は県有形）・戒壇院（本堂、鐘楼、鐘は県有形）として法灯を伝えている。	
5	筑前国分寺跡	国史跡	聖武天皇の命で全国に建立された国分寺の一つ。周辺で戸籍計帳木簡が発見され、国府など筑前国の関連施設も近くにあったことがうかがわれる。周辺景観は当時の面影を残している。	

6	大宰府学校院跡	国史跡	大宰府におかれた官人養成機関の跡。西海道諸国の郡司子弟が学んだ。ここに吉備真備が唐より持ち帰った孔子の肖像画が安置された施設が置かれていたと、大宰大貳大江匡房は『江家次第』に記している。現在県道沿いには、孔子廟に代々植え継がれている榎の木の種類を孔子の子孫家から譲り受け育てられたものが植樹されている。	
7	国分瓦窯跡	国史跡	筑前国分寺跡の北東にある瓦窯跡。側壁・天井部に日干し煉瓦を用いた登り窯である。8世紀中葉ころの窯とみられ、筑前国分寺の創建瓦を焼いたと考えられている。	
8	宝満山 (ほうまんざん)	国史跡	大宰府の北東にそびえる標高 829m の山で、古くは御笠山と呼ばれ、美しい山容を誇る。奈良時代より山中で国家的国境祭祀が行われた。最澄は入唐の際にここで薬師仏を彫り航海安全を祈願したと記録され、帰朝後は日本六所宝塔を發願し、ここに安西塔が建立された。中世には寺院や大宰府守護の館がおかれ海外交易なども行っていた。現在は竈門神社の社地となり、古代祭祀の山の風情を伝える。	
9	梵鐘	国宝 (工芸品)	観世音寺鐘樓の日本最古の梵鐘である。菅原道真が漢詩「不出門」で詠じているまさにその鐘である。現在も使用されており、その音は古代に響いたものと同一である。	
10	太宰府天満宮	国宝 (書跡) 国重文 (建造物)	大宰権帥として太宰府で亡くなった菅原道真の廟をはじめとする。天満宮安楽寺とも言われた。平安時代には大陸由来の曲水の宴などの行事が行われはじめ、現代に伝わるものもある。文人としても崇敬され貴族や武士が参詣した。文芸の聖地となり、連歌などが奉納され続けている。また、唐代の書籍である翰苑の平安時代の写しが残る。鎌倉時代には高麗国使高柔(コユ)が参詣して詩を奉納している。本殿が国重文に指定されており、境内は伝統行事と相まって古代の雰囲気を感じられる。	
11	太宰府天満宮神幸行事 (だざいふてんまんぐう じんこうぎょうじ)	県民俗 (無形)	平安時代(1101年)大宰権帥大江匡房により始められた神幸行事である。毎年9月、太宰府天満宮から菅原道真の謫居地であった府の南館跡(現在は榎社)まで古代の地割を引き継ぐ道を神幸する。神幸行列は神輿を中心に400～700人が古代衣装で供奉する。	
12	太宰府天満宮の伝統行事	未指定 (無形)	平安時代到大宰府の上級官人により宮廷の年中行事を大宰府にうつし、さらに天満神前で行われるようになったもので、「四度宴(しどのえん)」と言われた。現在に伝わるものは大陸	

			に起源をもつ「曲水宴」、「七夕宴」、「残菊宴」であり、宴では歌や漢詩を詠むことになっている。	
1 3	万葉集筑紫歌壇 (まんようしゅう つくしかだん)	未指定 (無形)	万葉集約 4500 首のうち、筑紫で詠まれた歌は約 320 首。奈良時代の神亀から天平年間に太宰府に滞在し万葉集に歌を残した著名な歌人集団。とくに大宰府帥大伴旅人邸で開かれた「梅花宴」32 首はその名を知られる。当時「梅」は唐から渡ってきた新奇な先進の文物のひとつであった。	
1 4	大宰府条坊跡 (だざいふじょうぼうあと)	未指定 (遺跡)	古代、東アジアの都で採用された基盤目の地割をもつ都市の跡である。飛鳥時代に造営され、奈良時代には政庁・朱雀大路を備えた。その姿は唐の長安城をモデルとした平城京と似ており、設計・造営には平城京造営責任者があっている。今も街の処々に条坊の痕跡をとどめた地割が残されている。	
1 5	官道[水城西門・東門ルート] (かんだう)	未指定 (遺跡)	大宰府の出入口となった水城の西門・東門を通過する直線道である。西門ルートは筑紫館(鴻臚館跡)と大宰府を結ぶ道で、外国使節はこのルートで大宰府へ入った。東門ルートは博多に繋がっており都からの官人赴任ルートとみられる。西門・東門ルートともに現在は市道として踏襲されている。	
1 6	軍団印出土地[御笠団印・遠賀団印] (ぐんだんいんしゅつどち [みかさだんいん・おかだんいん])	未指定 (遺跡) 国重文 (考古資料)	大宰府が所在した筑前国には 4 つの軍団が配置されていた。うちふたつの軍団の銅印「御笠団印」「遠賀団印」(ともに国重文)が発見された場所である。大宰府条坊の北西端にあたり、大宰府・筑前国を守備した軍団が駐屯していたことがわかる。	
1 7	般若寺跡 (はんにゃじあと)	市指定 (史跡) 国重文 (建造物)	孝徳天皇の病氣平癒を願って、筑紫大宰帥・蘇我日向が建てたとされる古代寺院。奈良時代に条坊内に移建されたとされる。当時条坊内の寺院は観世音寺と般若寺と、天皇ゆかりの寺院のみであった。塔基壇や塔心礎が見つかり、鎌倉時代に造立された石製の七重塔(国重文)が残っている。	
1 8	南館跡 (なんかんあと)	未指定 (遺跡)	館は都からの赴任者の官舎で、このうち「南館」は菅原道真が謫居した館として知られる。その後、道真の霊を弔うため大宰大貳藤原惟憲が 1023 年に浄妙院を建立し、ここと天満宮をむすぶ神幸行事が大宰大貳大江匡房により 1101 年にはじめられた。その場所は引き継がれ、今は榎社となっている。近くに客館跡があり、朱雀大路沿いの雰囲気を感じられる場所である。	

19	太宰府の梅	未指定 (天然記念物)	奈良時代、春一番に開き馥郁と香る「梅」は唐から渡ってきた先進の文物のひとつであった。万葉集には「梅花宴」が残されている。太宰府でも観梅は広まったが、とくに菅原道真が梅をこよなく愛したことから、飛梅伝説・浄妙尼伝承とともに、太宰府、太宰府天満宮に梅のイメージが重なっていった。現在も天満宮への献梅行事が行われ、多くの家々の庭に植えられている。(飛梅伝説は都から太宰府へ道真を慕って一夜で飛んできた梅のことで、本殿脇の木がそれと伝えられている。浄妙尼伝承は太宰府での不便な生活を強いられる道真に焼餅などを梅の枝に刺して差し上げたり、なにくれと世話を焼いた老婆の話である。現在太宰府名物となっている「梅ヶ枝餅」のはじまりとされる。)	
----	-------	----------------	---	--

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文、県有形、市無形、等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧 (1)

① 大宰府跡 (背後の山は②大野城跡、南から)



② 大野城跡 (中央の山、上が北)



① 大宰府跡 (正殿跡、西から)



② 大野城跡 (石塁「大石垣」)



① 大宰府跡 (南門跡から正殿を望む、南から)



③ 水城跡 (中央緑のライン、北から)



構成文化財の写真一覧(2)

③ 水城跡(北東から)



④ 観世音寺・戒壇院(南から)



④ 観世音寺・戒壇院(観世音寺 金堂)



④ 観世音寺・戒壇院(観世音寺 諸仏)



④ 観世音寺・戒壇院(戒壇院 本堂)



④ 観世音寺・戒壇院(戒壇院 盧舎那仏・戒壇)



※手前石段が戒壇。正面が盧舎那仏。

構成文化財の写真一覧 (3)

⑤ 筑前国分寺跡 (南西から)



⑧ 宝満山 (南西から)



⑥ 大宰府学校院跡 (南から)



⑨ 梵鐘 (観世音寺所在)



⑦ 国分瓦窯跡 (西から)



⑩ 太宰府天満宮 (本殿)



構成文化財の写真一覧(4)

⑪ 太宰府天満宮神幸行事



⑫ 太宰府天満宮の伝統行事(曲水の宴)



⑬ 大宰府条坊跡



⑭ 大宰府条坊跡



⑮ 官道(水城西門ルート、北から)



⑯ 官道(水城西門ルート、南から)



※正面の緑は水城跡

構成文化財の写真一覧(5)

⑮ 官道(水城東門ルート、北から)



⑰ 般若寺跡(塔心礎)



⑯ 軍団印出土地(御笠団印)



⑰ 般若寺跡(七重塔)



⑯ 軍団印出土地(遠賀団印)



⑱ 南館跡(現在の榎社)



構成文化財の写真一覧 (6)

⑭ 太宰府の梅 (太宰府天満宮の飛梅)



※複数ページにわたっても可